

◆季刊「展景」は一〇一号の今回から、発刊の月をひと月ずつ後にずらすことにした。年末年始や年度末を避け、印刷所の繁忙期にも重ならないようにするためである。これからは四月・七月・十月・一月の刊行となる。よろしくお願いします。

◆新たに会員へのお誘いをしたところ、数人が応え、原稿を書いてくれた。うれしい限りである。短歌の大橋千佳子さん、エッセイのギンジツク恭子さん。次回から短歌作品を出してくれるという返事を梅津純子さんから受け取っている。

もともとエッセイを連載していた新関伸也さんが復帰してくれた。超多忙となったときに休載して以来、久々の登場である。新関さんは天童の人だが、仕事の関係で長いこと滋賀県に住んでいる。「近江気まぐれ文学抄」は、近江に関する本を通して見えてくるものを捉える試み。関西のほうの知識や情報に触れる機会の少ない当方にとっても興味深いエッセイである。

大橋千佳子さんは久方ぶりに短歌をつくったという。表現の方法はいろいろあるが、ふたたび出合ったのだから、短歌という器に挑戦してほしい。ギンジツク恭子さんは古くからの友人。

最近は何賀状だけの付き合いとなっていた。インターネットでやり取りできる、いまの時代だからこそ縁がなくなったと思っている。遠い国であるスイスについて、日本人がイメージするものは乏しい。住んでみなければわからないことが多々あるだろう。生活に密着した「スイスからの便り」を楽しみにしている。

◆新型コロナウイルスの騒ぎが始まって一年になる。正直、もう飽きている。政府の対応の仕方である。何をどうしたいのかわからない。当方の生活はコロナ禍の中でも変わらない。ほとんど外食もしていなかったから、気をつけながら買い物をし、いまままで通り家でしつかり食べるだけだ。そんな折、「延暦寺の僧が十二年の修行満行」という記事を目にした。比叡山延暦寺で天台宗の開祖最澄に仕え、読経などを行うのが「十二年籠山行」。境内の浄土院にこもり、毎日朝の四時から読経するなどの修行を十二年のあいだ休まず行う。情報を得る手段はなく、世間から隔絶されているという。この修行を終えたのは渡部光臣住職（四十八歳）。山形大学理学部を卒業し、神戸の会社に勤務した後、比叡山に入山した人だった。修行を振り返り、「体力的にも精神的にも苦しかった」「引き続き最澄に仕え、世界を騒がしている疫病の退散を祈念したい」と話したそうだ。この僧の心持ちに少しでも近づけるように、仏教の入門書を読んでみようと思っている。

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。
61号からのバックナンバーも読むことができます。

季刊 展景
101号

二〇二一年四月五日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形市上町二一七―二〇二

info@muninokai.com